
フェトリアス物語～狼 - Low - ～

稲本 楓希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェトレアス物語〜狼-Low〜

【Nコード】

N7291Y

【作者名】

稲本 楓希

【あらすじ】

ユースナ暦925年、場所はゼンロ大陸の遙か南にある島国「パレセリア」。

アグノスの街の東に広がる「ソゲンの丘」。そこに建つ教会に住む十五歳の少年・フィルは、リオヤトトといった友達に囲まれて平和に暮らしていた。しかし、その頃街には、近くの森に出没するオオカミの姿をした凶暴な妖魔「ロウ」に関する噂が流れていた。

第一章 教会の少年

真つ暗な夜、空には星はなく、ただ満月だけが孤独に浮かんでい
る。その月明かりに照らされて、森には奇妙な静寂が漂っていた。
普段なら聞こえるはずの虫の声、木々のざわめき、梟の鳴き声、そ
ういったすべての音という音が、その森からは消えていた。まるで
森全体が何かの危険を感知して、息を潜めて身構えているかのよう
だった。

しかし突然、その静寂が破られた。何かの動物が暴れるかのよう
なせわしない音が、断続的に森に響いた。木々の間からこぼれる薄
暗い月明かりの小さな塊が、あちらこちらに暴れながら移動する、
その音の主をちらちらと映し出したが、それが一体何であるかが分
かるほどに照らし出すことはなかった。やがてその動物がのたうつ
ような音は斜面のある方に移動して行き、突然転げ落ちるような音
に変わった。その音に合わせるように、転げるそれを月明かりが照
らした。

やがてその動物は森から転げ出て、遂にその全貌が月光の元にさ
らけ出された。

それは、一匹の動物ではなかった。二匹の動物が、纏れ合って互
いにつかみ掛かっていたのだった。斜面を転げた勢いで地面にぶつ
かった衝撃で、纏れ合っていた二匹の動物は引き離された。すると
それらはすぐに体勢を立て直し、互いに睨み合った。

その片方は、鈍く輝く太くて長い体を持った、体長五メートルは
あるかという巨大な蛇だった。その二つの目は狂暴な怒りに赤くギ
ラギラと燃えて、もう一匹の動物を睨みつけている。

そしてもう一匹の動物は、その大蛇の半分くらいの大きさの狼だ
った。体の大きさでは大蛇に劣るが、毛を逆立たせ、銀色の牙と爪
を剥き出しにするその迫力は、赤い眼の蛇に対してもまったく退け
を取っていなかった。ただ、大蛇と大きく違うのは、その眼に怒り

を湛えていないという点だった。

その二匹の動物は、互いに唸って威嚇し合いながら、一定の距離を保って睨み合っていた。どちらも相手の一瞬の隙を逃すまいと眼を光らせながら、物音一つ立てずに少しずつゆっくりと移動して行く。

永遠とも思えるようなその緊張した時間の後、今にも切れそうになっている張り詰めた糸のような狼と蛇の間の空気が、ほんの少し揺らぐ瞬間があった。そして狼も蛇も、その揺らぎを見逃さなかった。

次の瞬間、二匹の動物は、再び纏れ合い、暴れ回っていた。大蛇が鋭い牙がズラリと並んだ顎を大きく開き、狼の首筋に噛み付こうとした。が、狼の方が一瞬早く、太過ぎる鞭のような大蛇の胴体に月光を受けて銀色に輝く、鋭く長い爪を食い込ませた。

すると、奇妙な事が起こった。狼の爪が食い込んだ辺りから、大蛇の体が光を放ち始めたのだ。その光は次第に大蛇の体を包み込んで行き、そして真っ黒だった大蛇の体は次第に形を失い、ただの影になって、闇の中に消えていった。

そしてさっきまで確かにそこに存在した、今はもう跡形もない、黒い体と朱い瞳の大蛇の残像を見つめながら、生き残った狼はその場に座り込み、そして顔を上げて虚しい表情で天に孤独に浮かぶ満月を見上げていた。

暖かな陽射しが差し込む気持ちのよい朝、アグノスの街の南東に広がる黄緑色のソゲンの丘では、小鳥達は心なしかいつも以上にはりきって、明るい声で歌を口ずさんでいるようだった。また、その丘に建つアグノスの教会の部屋に窓越しに差し込む朝日の光も、どいうわけかいつもより明るい色合いに見えた。

しかし、そんな明るい鳥の声も陽の光も、その部屋で眠っている一人の少年の眼を醒まさせる事はできなかった。男にしては長めの、

寝相でボサボサになった灰色の髪を持った十五歳の少年は、その顔に光が当たっているのも構わずに眠り続けていた。

その時、部屋のドアを叩く音がした。しかしその音にも、少年は目を醒まさない。するとドアを開いて、一人の若い男性が部屋に入ってきた。部屋の床には、『本の要塞』とでも形容するのがピッタリだと思えるほどに本が散乱していて、足の踏み場もないほどだったが、この部屋を歩くことに慣れている男性は、いとも簡単にその本の隙間を縫って、少年が寝ているベッドにたどり着いた。

「ほら、起きなよ、フィル」

男性は親しみの籠った優しい声でそう言いながら、少年・フィルを揺すり起こした。

「今日はリオちゃんやトトくんと一緒に街に行く日だろ？」

男性がそう言うと、フィルは微かに眼を開けた。それから少しの間、寝ぼけて何がなんだか分からないような表情をしていたが、やっと男性の言っていたことの意味が分かったのか、ふいに目を開いた。

「…ソール叔父さん、今何時？」

フィルは寝転んだまま、いかにも眠たげな声で尋ねた。

「だいたい8時半つてところかな」

叔父さんが答える。

「…じゃあ、あと十分だけ…」

フィルはそう言って再び眠りに落ちようとする。

「こら、十分も寝てたら朝御飯食べる時間がなくなるじゃないか」

ソールは顔では苦笑しつつ、しかしどこことなく有無を言わせぬ口調で言った。が、まだ眠たくてしょうがないフィルは五月蠅そうに窓側に寝返りを打つ。

「まったく、しょうがないなあ」

ソールは頭の後ろを搔きながら言った。

「それじゃあ、今日のトイレ掃除はフィルに頼もつかないかな？」

「待って、今起きるから」

ソールの言葉に、フィルは即座に反応する。トイレ掃除は、フィルが教会でする仕事の中でも最も嫌いな物だった。普段はソールが嫌がりもせずに請け負ってくれるのだが、フィルが言うことを聞かない時にはここぞとばかりに脅しがわりに使うのだった。

「じゃ、下で朝御飯用意して待つてるからね」

フィルの反応に満足して、ソールはそう言い残して部屋を出て行った。残されたフィルは目を擦りながら、欠伸をしつつ起き上がった。そして大きく延びをして、大儀そうにベッドから立ち上がった。フィルは階段を下りて下の階につくと、まず洗面所に行って顔を洗った。そしてそれが終わるとタオルで顔を拭きながらリビングに向かった。

窓からの日の光に照らされたリビングに据え置かれた、白く塗られた木の四角いテーブルには、ソールが用意した朝食が並んでいた。その日の朝食はパンとチーズで輪切りのトマトを挟んでこんがり焼いたトーストと、湯気を立てている柔らかそうなロールキャベツなどで、そのどれも美味しそうだった。どこで習ったのかは分からないが、ソールの作る料理の味はいつも一級品だった。

フィルが席につくと、それまで自分の朝食も食べずに待っていたソールは待ち兼ねたように、子供みたいに元気な声で「いただきます」と言っただけはじめた。そして、フィルもそれに続いた。ロールキャベツはフィルの好物だ。ソール叔父さんもそれを知っていて、事あるごとによく作ってくれる。それも、ここ最近は回数が増えているようだった。

そしてソールの料理は、いつも通り期待を裏切らなかつた。下手なプロの料理人よりもうまいのではないかと思うほどに、それらがあまりにおいしかったので、フィルはあつという間に全部平らげってしまった。

「…お、もうこんな時間か」

食事を終えてからしばらくして、ふと時計を見たソールが言った。それに釣られてフィルも時計を見ると、今日一緒に街まで行く友達

と落ち合う予定の時間の、ちょうど十分前だった。

「ほら、ぼちぼち出発しないと、また遅刻してリオちゃんに怒られちゃうんじゃないかい？」

ソールに言われて、フィルはダラダラと出掛ける準備をした。自分の部屋に戻って、壁に掛けてあった愛用している襷掛けのバッグを手に取り、部屋のおちこちを掘り返して出て来た必要な物をぞんざいに突っ込んでいく。

どうにも眠気が取れず、思考がはつきりしないまま準備を終えて、フィルはソールに急かされる様に教会を出た。

先ほどソールの話の中にも出たリオとトトは、フィルの幼なじみである。リオは教会の程近くにあるヴェルネ農園というぶどう農園の子供、トトは近所に住む鍛冶屋の息子である。ちなみに年齢で言うと、リオとトトはフィルの一つ上だ。

それらの一家を含む、アグノスの街の郊外であるソゲンの丘に住む人達は、冬になると雪のせいで街に行きづらくなる。だから、毎年秋になると、仮にその次の冬に大雪が出ても大丈夫のように、ソゲンの丘の人々は盛んに街に保存食の買い出しに行くのだ。

今回、フィル達が街に行くことになったのも、そのためである。食料だけに限らず、服だの本だのと、それぞれ思い思いの物を買っていくのだ。

フィルが三人のいつもの待ち合わせ場所である大きなコルク櫛の下に到着すると、そこには既に他の二人が揃っていた。一人はウェーブのかかった長い赤毛を薄手の上着に垂らした、ベルボトムをはいた少女で、もう一人はボサボサ頭で、Tシャツに長ズボンのラフな恰好の少年だ。

「あつ、来た来た」

赤毛の少女・リオが、フィルの姿を認めて言った。

「フィル、おはよう」

「おはよう、リオ」

リオの挨拶に、フィルも歩み寄りながら応じる。

「よう」

続いてトトも軽く手を挙げて言った。

「トトも、おはよう」

フィルは欠伸を噛み殺しながら言った。

「ずいぶんと眠たそうだな。夜更かしでもしたのか？」

その様子を見てトトが聞いた。

「ん…まあ、ね」

フィルは欠伸のせいで目に涙を浮かべながら、フィルは曖昧に答えた。

「…さて、これで全員揃ったわね」

そこで、場を仕切るようにリオが言った。

「それじゃ、このままここにも意味ないし、早速行きましょ！」

そう言うのが早いのが、リオは待ち切れないように一番に歩きだした。街に買い物に行くときは、買い物好きのリオが先頭に立つのが常だった。そして、リオほどは乗り気でないフィルとトトは、ダラダラとその後が続くのだった。

フィル達の住んでいる場所からアグノスの街までは、大体三、四キロの距離がある。その間は灰色の石で舗装された道で繋がっている。のどかな緑の草原に囲まれたこの道路は、素朴だが牧歌的ではない。かにも平和な雰囲気の人々に好かれていて、ひそかにアグノスの街の名所の一つと目されてもいる。実際、フィルもこの道路は好きだ。特に、街よりも高い高度にあるこの道路から一望できるアグノスの街の風景は素晴らしかった。

「ねえ、ところで二人とも」

道の途中で、リオが口を開いた。

「例の噂、聞いた？」

「噂って、なんのことだ？」

例の噂、だけでは当然分かるはずもなく、トトが聞き返す。

「ゆづべまた『ロウ』が現れたっていう噂よ」

リオがちょっともどかしげに言った。

「ああ、ロウって言えば、ここしばらく森の近くで出没してる、例の化けオオカミのことか」

トトはやっと話が分かって、なるほどというように言った。

「なんでも、ずいぶんデカくて狂暴らしいな」

「そうよ。なんでも、目撃した人によると、体長が二メートル半もあるっていうのよ。そんなのがこの街の近くに棲んでるなんて、怖いよねえ」

リオは道路の右側に広がる森に眼をやりながら言った。その森こそが、『ロウ』と呼ばれる化けオオカミが棲んでいると言われる森である。人々に『闇の森』とあだ名されるその森には、『ロウ』だけでなく様々な妖魔が棲みついているといわれ、最近では誰も近付かなくなっている。そのあだ名のとおり、朝だというのに森はどことなく暗く見える。

「でも、なんだかあんまり実感沸かないけど、アグノスがこうして妖魔に襲われないで済んでるのは、教会があるお陰なのよね。でしょ、フィル？」

リオはフィルに向かって言った。

「…うん、まあ、そういうことかな。邪悪な魂を持つてる妖魔は、教会には近寄れないからね」

フィルは少し間を置いて答えた。

「なによ、その張り合いのない返事は」

リオは少しむすつととして聞いた。

「そういえばフィル、最近ちょっと元気ないわね。調子でも悪いの？」

「別に、調子が悪いって言うほどでもないけど…」

フィルは慌てた様子で言った。

「…なんだかまだ眠気が取れなくて」

「もし、なにかあるんだったら遠慮なく言いなさいよ。私たち、友達でしょ？」

リオはファイルを見つめて言った。リオは昔から友情に厚く、勝ち気な性格も相まって、友達の事となるとお節介なほどに首を突っ込みたがるのだ。

「う、うん、分かったよ。でも、本当に大丈夫だから」

ファイルはどこかあしらうようにそう言うと、リオは少し拗ねたように、

「分かったわよ」

と言って、歩く速度を速めてスタスタと先に行ってしまった。

「おい、ファイル」

その時、トトがファイルに耳打ちした。

「リオを怒らせると怖いぞ」

「分かってるよ。たぶん、トト以上にね」

そう言ってファイルは苦笑した。

第一章・完

第二章 ローフ・ペーカー

アグノスの街は、大きな二つの島と、その周りの諸島からなるパレセリアの、東島の北部に位置するアルセイル地方に属する港町である。西側はスリト海に面していて、昔から東島と西島の間貿易路として発展してきたという歴史を持つ街である。

その為にアグノスの街は常に人や物の流通の激しい、多様な活気に満ちた街となっている。

そして、この街の一番の特徴は、街の人々がほぼ例外なく音楽好きだということである。元々は、長い航海を終えてきた人々を歓迎し、彼らの疲れを癒し、また航海の安全を願おうということによって音楽が発展してきたらしいが、いつの間にかやらそれが土地に定着して、独特な文化になってしまったのだと言う。

潮風で傷まないように特殊な塗料で塗られた白い街並みは、起伏の多い地形の都合からあちこちに階段や坂が複雑に連なっていて、どこか巨大な迷路を思わせるような楽しげな雰囲気を漂わせている。そんな複雑な構造のせいで、小さい頃からずっとこの街に慣れ親しんでいるファイルでさえ、一つ道を間違えれば今まで見たこともない場所にたどり着いてしまう事も少なくないのだった。

「ねえ、二人とも、どこか行きたいところ、ある？」

ソゲンの丘を下って、アグノスの街に入る大きなアーチ型の門にたどり着いた時、リオが聞いた。門は普段、昼間の間はずっと開けっ放しになっていて、誰でも好きに出入りすることができるようになってる。

「うーん、僕が用事があるのは図書館だけど、二人とも一緒に来たくはないでしょ？」

ファイルは言った。

「そんなの、当然だろ。オレを図書館なんか連れていってみる、あまりの気持ち悪さに吐くぞ」

すかさず釘を刺すようにトトが言った。トトは昔から本という本がなによりも嫌いなのだ。

「でしょ。だから、図書館には後で一人で行くよ。それで、トトとリオはどこに行きたいの？」

「私はやっぱりケート洋裁店ね。今のうちに新しい冬服を用意しなきゃ」

リオはウキウキした声で言った。

「じゃあ、トトは？」

とファイルが聞く。

「オレか？オレは……」

トトは何故か一瞬言葉を詰まらせた。

「実は親父から、納品を頼まれてんだ。なんでも、お得意先のパン屋のオーブンの金具が壊れたらしくて、そのままじゃ仕事に支障が出るから、できるだけ早く届けてくれって」

「パン屋っていうと、リュムさんのところのことね。そういうことなら、最初にそっちに行つた方がいいかしら？」

「あ、ああ、そうだな」

やはりトトはどこか様子が変だった。

「……どうしたのよ、トト。さっきからちよつと調子が変わじゃない？」

リオは心にもなく詰問するような口調になる。例によってリオのお節介癖が出てきたようだ。それ自体が悪いとは言わないが、リオの場合は気がつくところか責めるような声音になってしまつので、逆効果になってしまう事も少なくない。

「べ、別になにも変じゃねえよ」

トトは慌てて言い繕うが、そのどもり具合がすでにその言い訳の効果を打ち消してしまつていた。

「なによ。もしかして何か隠し事でもしてるの？」

納得できないリオはさらに問い詰める。

「まあまあ、リオ、トトが話したくない事なら、無理に聞かなくてもいいじゃん」

そこにフィルが仲裁に入った。リオもトトも頑固なところがあるから、このままでは堂々巡りになるだけだ。

「…もう、しょうがないわね。それじゃ、とにかくまずはパン屋さんに行きましょう」

本人もその事を自覚してか、リオはむすつとしながらもあえてそれ以上言及はしなかった。

「ありがとな、フィル」

リオが先を歩いているのを見ながら、トトはフィルに耳打ちした。「どういたしまして。でも、実際のところ、いったいどうしたの？」とフィル。

「それは、別に…なんでもねえよ」

トトはどこかばつが悪いような顔をして、ぶっきらぼうに答えた。「ふうん」

フィルはちょっとした悪戯心に駆られて、わざとらしく納得したふりをして見せた。するとトトは、少し怒ったようにそっぽを向いてずんずんと先へ進んで行ってしまった。

リュムという名の女性が経営するパン屋『ロウフ・ベーカリー』は、街の中心にあるミロディ広場のすぐ近くにある。広場に来るといつもどこからか漂ってくる、香ばしい美味しそうなパンの香りは、このパン屋から流れて来るのだ。

ミロディ広場は中心に噴水が据え置かれた直径百メートルほどの丸い広場で、街に住む人々にとっては暇な時間を過ごすかけがえない憩いの場であるのと同時に、街全体で何かの行事があるときの集会場にもなる。それ以外の時は、音楽好きな街の人々が気ままに音楽を奏でたり、近所の中年層の女性達（俗に言うオバちゃん）が井戸端会議を開いたりしていて、平和でのどかなムードを醸し出している。

フィル達は口ウフ・ベーカーリーに行く途中で、このミロディ広場を通り掛かった。すると、広場にはいつも通り噴水のさらさらという音とともに、音楽家達が気ままに奏でる音楽が流れていた。

広場を通り過ぎる途中で、ふとフィルは足を止めた。近くで二人のオバチャ…もとい、奥様方が世間話をしていた。

「…ねえ、ちよつと聞いた？ 闇の森にまた『ロウ』が出たんですってねえ」

「本当、世の中も物騒になったわねえ。いくら教会の力で守ってくれるって言われても、やっぱり怖いわよね」

「それだけじゃないわよ。ほら、この街って東西の貿易のお陰で成り立ってるじゃない？ うちの主人も貿易商をしてるんだけど、最近、妖魔が怖くて取引先が尻込みしてるらしいのよ。これじゃ、商売上がったりだわ」

「せめてフェルネル教団が、もつとちゃんと頑張ってくれると良いんだけどねえ…」

フィルはその世間話を、どこか複雑な気持ちで横から聞いていた。「ちよつと、フィル、何してんのよ」

その時、遠くからリオが呼ぶ声が聞こえた。フィルのせいで足止めをくらったせいで、少し苛立っているようだ。

「…ごめん、なんでもない」

フィルはそう言うと、急いでリオ達の方に走って行った。

「まったく、勝手にいなくなったら、ビックリするじゃない」

フィルが追いつくと、リオは責めるように言った。

「リオ、フィルがちよつと立ち止まったくらいでそんなにガミガミ言うなよ。そんなんじゃないつまで経ってもカレシできないぜ」

とトト。

「う、うるさいわね。べ、別にカレシなんか、欲しくもないし」

そう言うリオは、完全に動揺していた。

「…ってどうか、恋に落ちたこともないトトに言われたくないわよ」

「へえ、じゃありオは恋に落ちたことがあるのか」

調子に乗ったトトは揚げ足を取ってからかう。

「え、それは…！」

リオはドキッとしたように言葉を詰まらせた。

「へえ、あるんだな。いつたい相手は誰なんだ？」

トトはさも面白そうに言う。

「そ、そんなの、トトには関係ないでしょ！」

リオはブンブン怒って言い返した。

「はいはい、二人とも、そこまでしなよ」

トトがなおも付け入ろうとするので、仕方がなくフィルが仲裁に入った。一応、本人達のために誤解がないように言うておくが、二人は仲が悪いという訳では全くない。むしろ、よく言う『喧嘩するほど仲がいい』という間柄なのだ。フィルはただ、それに付き合わされる第三者である自分が気疲れするから、仲裁に入っただけである。

「それより早くロウフに行くんじゃないかったの？」

フィルが言った。

「あつ、そうよ」

それを聞いてリオは思い出したように言った。

「元はといえば、フィルが勝手に立ち止まったのがいけなかったんじゃない！」

怒りの矛先が、一瞬でフィルに方向転換した。

「そ、それじゃあ、僕は先に行ってるから！」

身の危険を感じたフィルは半ば叫ぶようにそういうと、急いで広場を逃げ出して行った。

「まったく、フィルったら…」

逃げ出すフィルを見ながら、リオは腕を組んで呟いた。

「あ、もしかして…お前が好きなのって、フィルか？」
とトト。

「な訳無いでしょ」

さっきまでの慌てぶりとは打って変わって、その問いに対してだ

けは、リオは恐ろしいほど冷めた声で即答した。そしてちらっとトを睨むと、プイッと顔を逸らすのだった。

「あら、いらっしやい、フィル君、トト君、リオちゃん」

ロウフ・ベーカーリーに入ると、カウンターの奥から、三角巾と赤いエプロンを着けた背の高いロングヘアーの若い女性が挨拶して来た。彼女が、この店のオーナーのリユム・トルキアスである。そこでフィル達も口々に挨拶を言った。

「あ、もしかして、トラスさんに頼んであった金具、届けに来てくれたのかしら？」

トトの顔を見て、リユムはふと合点がいったように聞いた。

「ああ、そうなんだ。困ってるだろうから、なるべく早く届けてやってくれって、親父が……」

トトはそう言いながら、背負っていたリュックサックから巾着を取り出した。そしてその中から棒状の金具を取り出した。どうやら、閉じたオープン蓋の蓋を固定するための棒のようだった。

「ほら、これで間違いないか？」

「わあ、ありがとう。本当に助かったわ」

カウンター越しにトトから金具を受け取ると、リユムはほほ笑んで礼を述べた。

「そうだ。お支払いをしなくちゃね。いくらだったかしら？」

「あ、いや……」

トトはそう制すと、ちよっと誇らしげに鼻をこすった。

「実は、その金具、オレが作ったんだ。見習いが作ったやつは、タダでいいんだ」

「えっ、コレ、トト君が作ったの？すごい！」

リユムはまるで子供のようにはしゃぐ。

「ま、まあな」

トトは照れ臭そうに言った。あまりに有頂天になっていたせいで、その時後ろから、リオの突き刺すような視線が飛んできていた事に

は気づいていなかった。

「…どうしたの、リオ？」

トトとリュムのやり取りを後ろから眺めつつ、ファイルは明らかに様子がおかしいリオを気遣って尋ねた。

「ファイルは黙ってて」

気遣ってくれたファイルには一瞥もくれず、リオは二人を冷めた目で睨んでいた。

「…なによ、トトだったら、デレデレしちゃって…」

少しすると、ファイルに聞こえている事も気付かずに、リオが険悪な声で呟いているのが聞こえてきた。

「リオ、もしかして…ヤキモチ？」

ファイルははっとして聞いた。

「え…ち、違うわよ！断じて違うわよ！だって、私がトトにヤキモチ焼く理由なんかないじゃない！ねえ！？」

リオはさっきまでとは打って変わって、真っ赤になって言った。

「ふうん、なるほどね」

ファイルはにやっとして言った。これですべての辻褄が合った。そして、続けて言った。

「僕は、お似合いだと思うよ」

「ちよっと、ファイル、勘違いしないでよね！私は、ただ…ただ…」

リオはすぐに言い訳しようとしたが、うまい口実を思いつけなかったのか、言葉を詰まらせた。そして、その事で余計にはつが悪くなる。

「大丈夫だよ、トトに告げ口なんてしないから」

ファイルは苦笑いして言った。

「え、ホントに！？…あ」

つい口を滑らせてしまった事に気付いたリオは、咄嗟に口に手をやった。今の話が聞かれていないかどうか確認するために、トト達の方に目をやる。幸運にも、トトとリュムは金具の調子を見るため

に、オーブンのある厨房に入っているところだった。

「…フィル…ホントに…トトにはらしたりしたら、ただじゃ置かないからね…」

「…はい…」

ただならぬリオの様子に、フィルはそう答えるしかなかった。

第二章・完

第三章 フォナル図書館

「さてと、それじゃ、ファイルはこれから図書館に行くんでしょ？」
オーブンの金具の受け渡しが終わわり、三人がロウフ・ベーカーリーを出ると、リオが聞いた。

「うん、そういう事になるかな」とファイルは答えた。

「…それにしても、お前、いつも図書館でなに調べてるんだ？」
続けてトトが不思議そうに尋ねる。

「え？まあ、それは…ちよつとね」

ファイルははぐらかすように言った。そして話を逸らそうと、続けて言う。

「それより、トトはどうするの？もう用事は終わったんだろ？」

「ああ、そうだな…他にやることも思い付かないし、どうするかな」
トトは答えた。

「それなら、リオが洋服買いに行くのについて行ってあげたら？」

トトの返答を見越していたファイルが提案する。リオがちよつと驚いてファイルを見たので、ファイルは意味ありげに目配せした。

「なんでオレがリオのお守りしなきゃいけないんだよ」
と不満げな声でトトが言い返した。

「それがいやだって言うんだったら、僕と一緒に図書館にでも行くかい？」

「リオ、こんなガリ勉はほつといて、さっさと行こう」

ファイルの言葉に悪寒を感じたのか、不気味な物から逃げようとするかのように後退りしたトトは、口早に言った。そしてリオの腕を掴んで歩き出した。

「それじゃ、ファイル、お昼頃にまたここで会いましょう！」

リオはトトに引つ張られながら背中越しにファイルを見て、心なしか上機嫌な声で言った。そしてウィンクをすると、トトと一緒にそ

の場を去って行った。

「…さてと、」

フィルは頭の後ろを掻いて言った。

「僕も、自分の仕事を始めるとするかな」

そう一人ごちて、フィルは今回街に来た目的である図書館に足を向けた。

アグノスの街唯一の図書館・フォナル図書館は、街の南東の端っこだであるシーヤ地区にある。賑やかさが一番の売りであるアグノスの街の中で、この南東の一角だけは例外的に閑静で、のどかでゆったりとした時間が流れている。たぶん、この静けさは、街の端に位置するために人家が少なくなり、反比例的に緑が多くなったという歴史的背景に起因するのだろう。

南東から射す日の光りが、道路の上をアーチ状に囲むほどに巨大に成長した街路樹を通して、木漏れ日となって降ってくる。そしてそれに、紅葉によって黄色く染まっている街路樹の葉がマッチして、幻想的な風景を作り出している。

そんな道路の突き当たりに、フォナル図書館はあった。赤いレンガが積み上がってできた、教会にも似た形をしているその建物は、見ている不思議と安心感が湧いて来るので、フォナル図書館は、自分の家でもある教会を除けば、フィルがもつとも好きな場所だった。図書館に入るとすぐの所にカウンターがあった。そこではほっそりした中年の女性が椅子に座り、机に開いてある帳簿に何かを盛んに書き込んでいた。そして何かを書き入れる度に、自分の右側に高く積み重ねた本を左側のワゴンの中に並べていつている。知的なメガネをかけた、いかにも真面目そうな顔をしたこの女性は、フォナル図書館の館長兼司書のヴィエラ・クイルスである。

「こんにちは、ヴィエラさん」

フィルが声をかけると、ヴィエラはそれまでならめっこしていた帳簿から顔を上げ、フィルを見た。

「こんにちは、フィル・トワイライト。またソールさんに頼まれて来たのですか？」

グイエラはカチャツとメガネの位置を正しながら、淡々とした声で聞いた。

「はい。それでまた、資料室に入らせてもらいたいです」

とフィルは答えた。フィルの言う資料室とは、この図書館の二階にある、人間を襲う邪悪な存在・妖魔に関する様々な資料を納めた書庫の事である。フェルネル教団に属する使徒の一人として、敵である妖魔について研究しているソールは、自分の研究の為に、度々その資料を借りるのだ。

「いいでしょう。もともとあそこにある資料は、アグノス教会の前の建物にあったものを、この図書館が預かっているだけです。御自由にお持ちなさい」

そう言つてグイエラは、カウンターの引き出しを開けて、資料室に入るための鍵を探していたが、不意に何かを思い出したように顔を上げた。

「ああ、思い出た。今、ニーナが資料室に入っているから、鍵は空いてるはずよ」

「分かりました。それじゃ、行ってみます」
そう言つと、フィルはその場を後にした。

フィルが図書館の奥にある階段を上り、二階につくと、そこは分類別にいくつもの部屋に分けられた書庫の入口が並ぶ廊下になっていた。その中でも、一番奥にある書庫が、妖魔の資料室である。

フィルがその、いかにも重たそうなドアノブを押すと、確かに鍵は開いていたようで、ドアはゆっくりと内側に開いた。

資料室は、開け放たれた窓を通して入ってくる日光によって白っぽく見える所と、影になつて真つ暗になっている所とがはっきりと分かれていた。そして、その白くなった部分には、誰かが雑然と積み上げた本によって、見事なまでに堅牢な『本の砦』が出来上がっ

ていた。

フィルは、自分の肩ほどまでの高さの砦の中を覗き込んで、言った。

「おはよう、ニーナ」

中には、本人の胴体くらいもある巨大な本に没頭する、大きな四角いメガネをかけた小柄な少女が座っていた。突然頭上から声が降ってきたので、少女は文字通り飛び上がった。その時、少女の肘が本の砦の内壁にぶつかった。すると、絶妙に保たれていた砦のバランスが一気に崩れて、砦を構成する大量の本が、フィルに雪崩かかってきた。一瞬の後、あわれフィルは本の下敷きとなっていたのだった。

「あわわ、フィルさん、大丈夫ですか!？」

覆いかぶさる本越しに、少女・ニーナの声が聞こえた。それに続いて、ニーナが本を掻き分ける音も聞こえる。

少しして、体が動かせるくらいに本がどかさされると、フィルはバサバサと本を振り落としながら、崩落現場を脱出した。

「ごめんなさい、フィルさん!」

ニーナは自責の念でやり切れなさそうな声で謝った。

「わたし、本に夢中になつてると、周りの音に敏感になっちゃうんです。そこにフィルさんが声を掛けてきたものだから……」

「いいよ、そんなに気にしなくて。そもそも、突然声をかけた僕も悪かったんだし」

ニーナがあまりにも深刻な、濟まなさそうな顔で謝るので、フィルは慌てて言った。

「それにしても、ニーナも物好きだね。僕やソール叔父さんみたいに、教団の関係者として勉強するためならともかく、趣味で妖魔の資料を読むなんて」

「えっ…あ、それは…まあ」

ニーナは自信なさ気に答えた。

「わたしって、変わり者だから……」

「別に、そういう意味で言ったんじゃないよ。ただ僕は、小説とかを読むのは好きだけど、資料みたいなのはそんなに好きじゃないから、ニーナってすごいなって思ってた」

フィルは言った。

「すごい、ですか…?」

ニーナはおずおずと聞き返す。

「うん。だってニーナって、どんな本を読むときでも、すごく生き生きしてるじゃん。僕もそんな感じに資料を読めたら、勉強も苦じゃなくなるのになって」

フィルはそう言って苦笑した。

「…さてと、僕は妖魔の資料を探さなきゃ!」

「あおう、わたし、手伝いましょうか?」

ニーナは控えめな声で言った。

「え、いいの?それは助かるよ。『セルペンテ』っていう妖魔の事を調べたいんだけど」

フィルがそう言うと、ニーナはちらつとフィルを見た。

「…確か、蛇の姿をした妖魔ですよ。それだったら、妖魔全書の五巻あたりとか…」

ニーナは右の人差し指を下唇にあて、考え込んで言った。

「まさか、全部覚えてるの?」

「そうじゃないんです…妖魔全書は、名前順になってるから、そこから推測したんです」

「なるほどね。それで、妖魔全書の五巻って、どこにあるか分かる?」

そうフィルが尋ねると、ニーナはおもむろに、崩壊した『本の砦』を指差した。

「ありやりや…まあ、どっちにしても、これは片付けないとね」
フィルは頭の後ろを掻きながら言った。

「ちょっとトト、私がこんな服を着る訳がないじゃない！」

リオはそう言って、ハリセンでトトの頭をひっぱたく。

「いってえな、服一つ勧めただけでなんで叩かれなきゃいけないんだよ。つか、そのハリセンどっから出したんだよ!？」

トトは叩かれた頭を庇いながら言う。

「だいたい、この服のどこが悪かったんだよ？」

「私はね、そういうモコモコが何より嫌いなよ!そんなの、言われなくたって分かるでしょ？」

リオはトトが手に持っている服の、襟や袖口についた羊毛のモコモコを指差して、不満げに言う。

「分かるわけないだろ!以心伝心じゃあるまいし」

「察しなさいよ、こつ、雰囲気で!」

「なんだよ、そのムチャ振りは!」

トトは呆れて言い返す。

「大体、なんでオレがお前の服選びに付き合わなきゃならないんだよ。せつかく服を勧めてやったのに、そうやってカリカリ怒るんだつたら、オレはもう帰るぞ」

「え、そんな…ちょっと待ってよー!」

トトが本気で店を出て行くこうとするので、リオは慌てて引き止めるのだった。

「ところでフィルさん、セルペンテの何を調べるつもりなんですか？」

ニーナは崩れた本を棚に戻しながら、何気なく尋ねた。

「え?ああ、それは…彼らがどんな場所に『巣』を作るのかが知りたいんだ」

フィルは答えた。

妖魔には、姿も力も巨大な『親』と、その親から生み出される『子』の二種類がいる。教会の名の元に妖魔を退治する『被魔師』が

妖魔を浄化して倒すときは、いくら『子』を倒しても、その『親』を倒さないかぎり、『子』を増やされつつけてしまうので、その根源を断つために『親』が潜んでいる『巢』の位置を調べることが重要となるのだ。

「そうですね…でも、どうしてフィルさんが、そんなことを？」

ニーナは首を傾げて聞いた。被魔師であるどころか、直接妖魔と関わることもないフィルが、何のためにそんなことを調べるのか、と疑問に思うのは、ごく自然なことだった。

「まあ、ちよつと興味があつてね」

フィルは曖昧に答えた。

「それに、最近闇の森に、セルペンテが棲み着いてるみたいだから、念のためにね。こういう情報が、いつ必要になつてもいいようにしておかないと」

「え、そうなんですか？」

ニーナは驚いたように言った。

「知らなかった？」

フィルは振り返つて聞き返した。

「はい…だつて普通は、妖魔が出たら大騒ぎになるじゃないですか。でも今、セルペンテが出たなんて噂、流れてませんよね」

ニーナは少し訝るようにフィルを見た。

「…あの、もしかして、フィルさん…」

「あ、あつたあつた。妖魔全書の五巻！」

その時ちよつど、大分片付けられた崩落現場から、目的の本を発見して、フィルが嬉しそうに言った。ニーナは突然のフィルの声にびくつと驚いて、喋ろうとしていた言葉は尻すぼみにどこかへ消えて行つてしまった。

「さてと、セルペンテは…あつた！ニーナの言う通りだ」

早速セルペンテの頁を見つけると、フィルは自分の欲しい情報を見つけようと、文章を斜め読みした。

頁の左上には、セルペンテの文字とどぐろを巻く蛇のスケッチが

描かれている。その下には、平均的な体格などが記されている。そして、右の頁から数頁に渡って、文章による説明が綴られている。「えーっと、『セルペンテは、地面に長い穴を掘り、そこに巣を作る。巨大な体を持つセルペンテの巣は、広い土地を必要とする。また、身近に餌があつて、人間から見つかりづらい森を好む習性がある。したがつて、巣を作るのは地下に充分な場所があり、かつ邪魔になる大木などのない、森の中の広い空き地である』か…セルペンテの親は体長が十五メートルもあるから、闇の森で巣を作る場所はかなり限定されることになるかな」

フィルは独り言を言いながら、パターンと本を閉じた。

「手伝つてくれてありがとう、ニーナ。お陰で早く見つかったよ」

「いえ、そんな…わたしの方こそ、フィルさんに本をぶちまけちゃつたりして、すみませんでした…」

「だから、それは気にしなくていいって」

フィルは手を振つて言った。

「それじゃ、さっさと残りの本を片付けちゃおう」

そう言つて苦笑するフィルを、ニーナは意味ありげに見つめるのだった。

第三章・完

第四章 ローとセルペンテ

昼だというのに日が射さず、真っ暗で静寂に満ちた『闇の森』。その奥深くにある、一本の木すらも生えていない巨大な空き地。そこに、直径一メートルはあるかという洞穴があった。その奥からは、洞窟特有のヒューヒューという風が吹く音が聞こえてくる。

周りに、生き物の気配はなかった。ただ、その洞窟の中からだけ、何か、悍ましい気配が風に逆行して漂って来ていた。

突然、洞窟の中からザラザラと、何かが地面を擦る音がした。その音は始めは小さかったが、次第に大きくなって行った。そしてそれが最大に達した時、洞窟の出口に、シュルシュルと動く枝分かれした舌が現れた。そしてそれに続いて、不気味に光る巨大な蛇の頭部が姿を表した。色は紫色で、目は真っ赤にぎらついている。そして、緑色の舌をしきりに出し入れしながら、滑るように蛇行して穴からはい出てきた。

そして、体のすべてが巣穴から出てきたが、その長さは五メートルほどだった。まだ舌を出し入れしていたが、不意に何かを嗅ぎ取ったように、ある方向に頭を向け、そちらに向かって移動しはじめた。

大蛇がスルスルと蛇行して行くと、やがて森は途切れ、大蛇は陽光に曝された。よほど光に弱いのだろう、蛇は悲鳴を上げ、安全な森に逃げ戻り、木陰から外の様子を窺っていた。

そうしている内に、だんだんと空に雲が現れはじめた。さっきまでは晴天だったのが、あつという間に辺り一帯は真っ黒な雲に覆われて行った。そしてその雲は太陽を取り囲み、徐々に包囲網を狭めていき、やがて太陽を覆った。そして、昼とは思えないような闇が訪れた。

それをじっと見ていた蛇は、太陽が覆われると共に、嬉々として森を抜け出して行った。その目指す先には、白い建物が並ぶ街があ

った。

「どうしたのかしら…さっきまであんなに晴れていたのに」

リオは不安げに空を見つめて言った。こんなにあつという間に空が雲に覆われるなんて、いくらなんでも不自然すぎる。それも、白い雲ではなく、真っ黒な雲なのだ。

「確かに妙だな。何が起こってるんだ？」

隣に立っていたトトも、空を眺めながら言った。

「それにしても、ファイルのやつはどうしたんだ？ 昼頃に集合するって、ちゃんと置いて置いたはずなのに」

「ホントよね。あの子、なんであんなに時間にルーズなのかしら」
リオは腕を組んで賛同した。

「そりやお前、お前のことが怖くて気後れするんだろ」

トトは冷やかし声で言う。

「なによ、それ！ そもそも、私に怒られたくないんだったら、なおのこと時間通りに来ればいいじゃない！」

リオはプリプリして言った。

「だってお前、時間だけじゃなくてなんでもかんでもガミガミ言うじゃないか」

「それは、どっかの男どもがあんまりだらし無いもんだから、その分私がいかりしなきゃいけないくなるんじゃないの」

リオは横目でトトを睨む。

「本当だったら、私だってもつとこう、女の子らしく、おしとやかでいたいわよ。なのにあんた達が…ってちょっと、トト、なんでそんな吐きそうな顔してるの！」

「だって、お前がおしとやかになるなんて、考えただけで吐き気が…」

トトは喉を押さえて、ゲーゲー吐く真似をして見せた。

「もうっ、失礼しちゃう…あっ」

その時、リオは建物の隙間から、向こう側の道を走る見慣れた灰色の髪を見たような気がした。

「あれ、今通ったのフィルじゃない？あの子どもどこ行こうとしているのかしら？…ちよつとトト、いつまでも吐く真似なんかしてないで、フィル追っかけるわよ！」

リオは約束をすっぱかしたフィルに制裁を与えるためにハリセンを手に構え、もう片方の手でトトの首根っこを掴んで引きずりながら、フィルの後を追っかけて行くのであった。

リオとトトが、フィルを見かけた建物の隙間を通って向こう側の道路に出ると、ちょうどフィルが角を曲がるところが目の端で確認できた。あと一瞬行動が遅れていたら、見逃してしまっていただろう。そこでリオは、すぐさまフィルが曲がった角へと走った。その後を、慌てたトトがついて来る。

(…この道順って、ソゲンの丘に向かうルートよね。フィルったら本当にどこに行くつもりなのかしら)

リオはますます訳が分からないまま、フィルの追跡を続けた。フィルがさつき曲がった角を曲がると、またしてもギリギリフィルがその先の角を曲がるのが見えた。

「ほら、トト、なにノロノロしてんのよ！フィルを見失っちゃうじゃない！」

トトが遅れて追いついて来るので、リオは苛々して言った。

「お前：実はちよつと楽しんでるだろ」

「そりゃそうよ。追跡任務なんて、スパイみたいでカッコイイじゃない！」

リオは目を輝かせて言う。

「ほら、さつさと行くわよ！」

やっと追いついてきた愛しのトトの手を掴んで、リオは張り切った声で言った。

「ったく、これだからリオのお守りは嫌なんだ」

トトはブックサと言いながら、リオにされるがままに引っ張られ

て行くのだった。

どうやらリオの予想通り、フィルは街を出てソゲンの丘に向かっているようだった。リオとトトは、フィルに気づかれぬように少し離れてそれについて行った。

そうしている間に、雲行きはさらに悪くなって行った。こんなに雲に覆われているのにまだ雨が降り出さないのが不思議だった。

フィルは街の門を出ると、家のある真っすぐの方向ではなく、左側の道へと足を向けた。

「フィルったら、本当にどこに行くつもりなのかしら」

リオはフィルの後ろ姿を眼で追い掛けながら、ふと口に出した。

「それより、お前、こんなに走り続けて、なんでそんなに、元気なんだよ」

そこに息も絶え絶えのトトが追いついてきた。

「だらし無いわねえ、トト。これしきのことではバってんじやないわよ！男でしょ！？」

リオは腕を組んで言った。

「無茶、言つなよ……」

「さっ、それじゃ行くわよ！」

「待つて……せめて、ちよつと、休憩を……」

そう言いながらも、リオに逆らうとどうなるか、よく弁えているトトは、後について行くしかないのであった。

フィルは、ふと立ち止まって後ろを振り返った。誰かがついて来ているような気がしたのだが、気のせいだったのだろうか、後ろには誰もいなかった。

そんなことをしている暇がないことを思い出して、フィルは再び走り出した。

今、空を覆っている雲、これは間違いなく妖魔が作り出したものだ。昔、ソール叔父さんから教わったことがある。妖魔は日の光に

は極端に弱い。そのため、普通は妖魔が活動するのは夜中なのだが、妖魔が昼間に活動するときは、こういう風に黒い雲を呼び出して、太陽の光を遮るのだ。

実物を見るのは初めてだったが、この雲がそれであるのは疑う余地もなかった。

だとしたら、それは妖魔が行動しようとしていることを示している。当然、その目的は人間を襲い、喰らうことだろう。

幸い、妖魔の住処である闇の森からアグノスの街までは距離がある。どうか、街に着いてしまう前に妖魔を探し出したかった。

フィルは街を出ると、闇の森がある北側へと進路を取った。行く手の右側には、鬱葱とした闇の森が見える。妖魔の進路を予想してみても、妖魔とぶつかるのはそう遠くはないだろう。

どうやら、間に合いそうなので、フィルは少し歩調を緩めた。妖魔と遭遇する前にバテてしまつては、なんの意味もない。

やはり、誰かがついて来ている気がしてならない。だが振り返っても、誰もいない。その時、近くの背の高い叢が不自然に揺れたのだが、フィルはそれには気づかなかつた。

その時、シャーシャーと細い隙間から風を押し出したかのような音がした。フィルが振り返ると、そこには全長五メートルほどの細長い体、しきりに突き出される緑色の舌、そして真っ赤に輝く目があつた。

「やっぱり、この雲は妖魔のせいだつたんだ。念のため、アレを持つてきておいてよかつたよ」

フィルは、自分の数倍の大きさの妖魔・セルペンテを前にしても、まったく怯む事なく落ち着いた声で言った。セルペンテは、隙あらばフィルを食つてやろうとしているようだったが、なかなかその隙を見つけれないでいた。

そしてフィルは、襷掛けにしていたバッグを地面に下ろすと、そこから何かを取り出した。

縛っていた紐を解き、フィルが広げたそれは、一枚のマントだつ

た。フィルの髪と同じ色合いの、灰色のフード付きのマント。背中部分には、何か不思議な紋様が描かれている。

「人間に手を出すことは、僕が許さない！」

フィルはそう言うと、マントを身につけた。ちょうどその時、セルペンテは待ち切れなくなつたように、口を大きく開いてフィルに襲い掛かった。しかしフィルはそれを躲そうとはせず、ただ、マントを翻した。

すると、フィルの体が灰色のオーラに包まれた。そのオーラがセルペンテの牙を弾き、セルペンテは驚いて後退した。

灰色のオーラはフィルを包んだまま大きくなっていき、突然弾けた。するとその中から現れたのは、フィルではなかった。

二メートル半もある巨体、灰色の体毛、体毛よりも濃い灰色の瞳、銀色の爪を生やした四本の脚。

そこに現れたのは、巨大なオオカミだった。

「うそ…何これ…何がどうなってるの!？」

叢からその様子を見ていたりオとトトは、文字通り絶句していた。さつきまでフィルがいたところが、灰色のオーラに包まれ、それが消えるとそこにはオオカミ、それも街で噂になっている妖魔『ロウ』が現れたのだ。気が動転するのも当然である。

「まさか…狼、人間…?」

まだ驚きからまったく立ち直れないトトの口から、自然と言葉が漏れた。

その時、ロウが吠えた。周囲の草をそよがせるほどの雄叫びに、リオもトトも反射的に顔を腕で覆った。

セルペンテは怒りの籠った眼で、ロウを睨みつけた。威嚇のために大きく開かれた顎に生えた牙からは、緑色の毒が滴っている。

対するロウの方は、怒りというよりむしろ哀れみのようなものが籠った眼差しで、セルペンテを見つめていた。

二匹は少しの間睨み合っていたが、やがて、セルペンテが先に行動を起こした。

セルペンテが真つすぐ襲い掛かってきたのを、ロウは横つ跳びに躲した。セルペンテが振り返ろうとする隙に、今度はロウが襲い掛かる。銀色に輝くロウの牙と爪がセルペンテに食い込んで、気味の悪い緑色の血をほとばしらせた。

セルペンテが倒れ込んで、地鳴りを響かせた。ロウはすぐにそれを脚で押さえ込もうとするが、自分の倍の大きさのある大蛇がのたうちまわるのを押さえつづけることが出来ず、一先ず後ろへと下がる。

セルペンテは狂気に満ちた声を上げて、体勢を立て直した。ロウにつけられた傷痕からは、緑の血が滴り続けている。

セルペンテが再び躍りかかって来ると、ロウは体を素早く一回転させた。すると、ロウの長い尻尾が鞭の様にしなり、セルペンテに打ち付けられた。その攻撃でセルペンテが怯んだところに、ロウが襲い掛かり、その胴体に噛み付いた。

セルペンテは再びのたうちまわってロウを振り落とそうとしたが、ロウは今度は簡単には放さなかった。

二匹の妖魔は纏れ合ったままのたうち、互いの体を地面に打ち付け、互いに致命傷を与えようと暴れ回った。そして、セルペンテの毒がたつぷり付いた牙がロウに噛み付きかけたので、ロウは急いで跳びのいた。セルペンテの攻撃は躲せたが、そこに一瞬の隙ができた。

セルペンテはその隙について飛び掛かった。今度は横に跳んで避けられるだけの猶予もない。もはや、ロウの負けは決まったようなものだった。

しかし、セルペンテの毒牙がロウに突き刺さる、まさにその瞬間、ロウは灰色のオーラに包まれた。セルペンテの牙は空を貫き、セルペンテ自身も飛び掛かった勢いのまま地面にたたき付けられた。

そして、それまでロウがいた場所には、マントを身につけたファイ

ルが立っていた。そしてフィルは再びマントを翻すと、灰色のオーラに包まれてロウへと変身した。

そしてロウは、完全な隙を作ったセルペンテに飛び掛かり、その胴体に長く鋭い爪を食い込ませた。

するとセルペンテは光に包まれていき、その体は崩れて行った。

セルペンテの姿が完全に消えた後、そこには白く輝く一つの光の球が浮いていた。光の球は少しの間そこに留まっていたが、少しするとどこかへ飛び去って消えて行ってしまった。

セルペンテが完全に消滅すると、ロウは灰色のオーラに包まれて、フィルへと戻った。

フィルはふと近くの叢に目をやった。たった今目の前で起こったことに驚くあまり、リオとトトは自分達がフィルから丸見えになっていたことに気がついた。

リオとトトが何か言おうとすると、フィルは悲しそうに目を伏せて、その場から立ち去って行った。

第四章・完

第五章 狼人間

優しいそよ風が草をなびかせるソゲンの丘、そんな草原に建つアグノスの教会。その赤い三角屋根の上から、物静かなフルートの音色が聞こえてきた。

教会の屋根の上に座ったフィルは、愛用の細長い横笛を持ち、その唄口に息を吹き込む。すると管の中を通った空気が音を生み出し、虚空に侘しく響き渡る。そのもの悲しげなトーンは今のフィルの心境を如実に表していた。

フィルはフルートを吹く手を止めて、纏っているマントのフードを目深に被った。このフルートとマントは、フィルの両親がフィルに残してくれた数少ない物の内の二つだった。

特にこのマント、普段はフィルの中に眠っている狼人間としての能力を引き出し、フィルをオオカミに変身させるための媒介であるこのマントは、フィルにとっては代えがたい宝物だ。

フィルがまだ幼いうちにどこかへ立ち去って行ってしまったフィルの父親・ファルシウスは、狼人間だったらしい。フィルが狼人間としての自覚を持ちはじめた頃に、ソール叔父さんがそう話してくれた。

言うまでもなく、狼人間とは普通の人間から見れば異形の存在であり、恐怖と嫌悪の対象だ。生まれながらにして狼人間であったフィルが、普通の人間の中で暮らして行くためには、その正体を知れない事が絶対条件だった。

だが、見られてしまった。いずれこういう日が来ることになるだろうと、覚悟はしてきたつもりだった。だが、実際に直面してみると、何をどうしていいか分からなくなってしまうた。

例え他の誰に気づかれることになっても、気付かれなくなかった親友の二人に見られてしまったのだ。どんなに二人がフィルにとって親友だったとしても、いや、だからこそ、それが狼人間だと知っ

た時のショックは大きいだろう。そして、きっと裏切られたように思い、フィルを怖れ、嫌うようになるだろう。

もう、アグノスにはいられない。それが、今の時点で分かっているただ一つの事実だった。すぐにでも、ここを立ち去って、どこかここからの噂が届かないような場所に移らなければならぬだろう。アグノスの街もソゲンの丘も、そこに住む人々も大好きなフィルにとっては、そう考える苦しさは計り知れなかった。

「私、未だに信じられない…まさか、ロウの正体が狼人間で、しかも…フィルだったなんて」

叢に寄り掛かって、リオは胸を手で押さえながら、喋るのも辛い様子で言った。ロウは恐ろしい妖魔だという噂を前々から聞いていたのもあって、頭が完全に混乱していた。

「ねえ、トト…私たち、これからどうしたらいいのかしら」

リオはいつになく覇気のない、弱々しい瞳でトトに縋るように聞いた。

しかし、トトは答えなかった。リオの事を無視している訳ではない。トトも同じことで頭が一杯で、リオに答えるだけの余裕がなかったのだ。トトは何も言わず、考え込むようにどこか遠くを見つめていた。

「フィルは教会に住んでいて、ポケットとしてるけど根はいい子で、私たちの親友で…でも、ロウは人を襲う狂暴で、恐ろしい妖魔で…私、何がなんだか…」

リオは弱音を吐いて、頭を掻きむしった。

「何か、引っ掛かる…」

ふいにトトが呟いた。

「…なにが？」

リオが聞き返すと、トトはちょっと驚いたようにリオを振り返る。自分の傍にリオがいることも忘れるほど、トトも気が動転している

ようだった。

「さっきのフィルの行動…どうして、妖魔と妖魔が戦っていたんだ？」

「それは…もしかして、縄張り争いとか？」

リオは咄嗟に思い付いたことを口にした。実際、そうだと考えれば一応、辻褄は合う。

「そうかもしれない。でも…そうじゃないかもしれない」

トトは言葉を選ぶようにゆっくりと言った。

「どういう意味よ」

リオはさらに続きを促すように聞く。

「フィルは、もしかしたら…あの蛇の妖魔から街を護ろうとしたのかもしれない」

トトは顎に手をあてて言う。

「でも、ロウは今まで何度も街の人間を襲ってるのよ！それに、妖魔は人間の敵であって、味方じゃないわ」

リオはすぐに反論する。トトもそれに言い返すことは出来ず、二人は黙り込んでしまった。

「…オレ達二人とも、一人になって考える時間が必要かもしれないな」

しばらくして、トトが口を開いた。

「この事はまた明日話し合おう。それまでは、フィルの正体については他の人には明かさない方がいい」

「そうね、それがいいと思う…」

リオも意気消沈した声でそれに賛成した。

「…なあ、親父」

その日の夜、トトは自分の父親・トラスに声をかけた。トラスは、鍛冶屋としての仕事を終えて、使った道具を片付けている途中だった。

「なんだ、トト」

トラスは振り返って聞いた。

「ちよつと相談したいことがあるんだけど、いいか？」

「お前が相談事とは珍しいな。なんだ？アグノス一頼れる男のこのオレが相談に乗ってやるぞ」

トラスはニヤツと笑って言った。

「つたく、どうせまた『自称』だろ」

「悪いかよ」

本人では最高傑作のギャグを言ったつもりでトラスは、上機嫌に言う。

「はあ…」

いつも通りの陽気な父親の様子に、真剣に相談を聞いてくれる気がまったくしないので、トトはため息をついた。

「親父、オレ、結構真剣なんだけど」

「分かった分かった、そんな怖い顔すんなよ。相変わらずそういう所だけはかーちゃんに似てやがる」

トラスはまた冗談を言いつつも、さすがに少し真剣な顔になった。

「親父、もしもさ…もしも、信じてた親友が、実は裏ではすごく悪い奴かもしれないって分かったら、親父だったらどうする？」

トトは言った。

「ほお、なるほどな。お前もそういう事を経験する年頃になったって訳だ」

トラスは何故か少し嬉しそうに言う。

「親父…」

「分かってる、分かってるって。真剣に話せてんだろ」

トラスはそう言うと、大きな欠伸をした。

「なあに、こう見えてオレもよお、お前の三倍はいろいろ経験してきてんだよ。いいから、黙って聞け。」

まだお前が生まれる前の事だったな。その頃オレには仲のいい呑み仲間がいてよお。ファルシウスってんだが、そいつはスゲーいい

奴でよ、よく酒場に行つて酒を酌み交わしてたのさ」

トラスは昔を思い出すように言った。

「本当に、あいつはいい奴だった。だからよ、あいつが狼人間だったって知ったときゃ、そりゃ驚いたもんだぜ」

「ちよ、ちよつと待った！」

トラスがさらつと言つたあまりに唐突な発言に、トトがストップをかけた。

「それって、もしかして、フィルの父親か!？」

「そうだが、それがどうしたんだ？」

トラスは無頓着にキョトンとして聞き返す。

「ちよつと待つて、気持ちを落ち着けないと……」

トトはそう言つて、胸に手をあてて深呼吸した。そして少し経つて落ち着いてきたので、再び口を開く。

「……どうして、ファルシウスさんが狼人間だつて知つたんだ?何かの拍子で見たのか?」

「あ、いや、それはな……酔つた勢いで、ボソツとな」

(フィルのお父さんって、結構迂闊だつたんだな)

トトは心の中で呟く。

「それで、それを知つて、親父はどうしたんだ?」

「そりゃ別に、どうつてことなかつたぜ」

真剣なトトとは対照的に、トラスは平然と答える。

「どうつてことなかつたつて……なんだよ、それ」

トラスの答えに、トトは呆れて言った。

「だからよ……オレはな、そんな時思つたんだよ、オレの知ってるあいつを信じてやるうつてな」

トラスは、自分ではドラマのクライマックスのワンシーンを演じているかのようなつもりで、わざとらしい声で言った。

「あいつが狼人間だろうが何だろうが、オレが仲良くしていたあいつは本物だつて思うことにしたんだ」

「やっぱ親父つてすげえな……いろんな意味で」

トトは頭の後ろを掻きながら言った。
「ま、いいや。ありがと、参考になった」

その夜、部屋に戻ったファイルはランプを点けて、本棚から四つ折になった紙を取り出した。机に持って行ってそれを広げると、それは闇の森の地図だった。森の地形や植生が事細かに記されていて、その上にファイルの筆跡で様々な書き込みがされている。

ファイルは椅子に座り、ため息を一つつくと、ペンを手にもって地図を凝視しはじめた。セルペンテが営巣するのは森の中の広い空き地。ざっと地図を見渡すと、それらしい空き地は東側、北東、南西に合計三つ見つかった。

「地図からじゃこれ以上はしぼれない、か」
ファイルは呟いた。

「でも、セルペンテが他の街じゃなくてアグノスを狙ったっていう事は、西側の方が可能性が高いから、そっちから順番にしらみ潰しに見ていくのがいいかな」

その時、部屋のドアを叩く音が聞こえた。

「どうしたの？ ソール叔父さん」

ファイルがそう聞くと、気遣わしげな声が返ってきた。

「今、リオちゃんの下に来てるんだけど、会うかい？」

今日まではソールは、ファイルが狼人間である事を知っている唯一の人間だった。そして、今日ファイルがリオとトトに狼に変身するところを見られたということも承知している。

「ううん…悪いけど、帰ってもらって」

ファイルは複雑な心境で言った。

「分かった」

ソールは存外にも素直に了承した。そして、ソールが階段を下っていく音が、扉越しに聞こえた。

「…やっぱり、帰ってほしいって」

一階に下りたソールは、ダイニングルームで椅子に座っていたリオに言った。テーブルにはソールがリオのために入れた紅茶が置いてあったが、リオはそれには手を付けていなかった。

「そうですか…」

リオは肩を落として言った。

「ごめんなさい、こんな夜分遅くにお邪魔したりして…」

「いいや、謝るのはこっちの方だよ。こんな事を突然知ることになっちゃって、ショックだったろう？」

ソールは親身な声でそう言いながら、リオの向かい側に座った。

「はあ…」

リオは目を伏せて様々な迷いを抱えたような声で言う。

「フィルも、ずいぶん悩んでたんだ。君達にこの事を話すべきかどうか。いずれ分かることだから自分の口から言った方がいいって、僕は言ったんだけど、フィルはどうしても、君達とは普通の人間として友達で居たかったらしいんだ」

ソールは淡々と話した。

「それだけに、他の誰よりも君達だけには、バレたくなかったんだろうね。相当落ち込んでるよ」

「…あの、ソールさん」

リオは少し顔を上げて口を開いた。長い赤毛が少し揺れる。

「何だい？」

「フィルは、その…人を襲ってるんですか？」

リオは勇気を出してその疑問を口にした。今日は、そのためにここに来たのだ。

「君は、どう思うんだい？」

質問に対して、ソールは意味深に返す。

「私…私は、フィルを信じたい…でも、狼人間って、変身すると正気を失うって聞いたこともあるので…」

「そうだね、狼人間はそう沢山いる訳じゃない。それだけに、様々な憶測や偏見が噂されるけど、フィルがどんな狼人間かをはっきりさせる、簡単な方法があるよ」

ソールはちよつといたずらっぽく言う。

「それは、何ですか…?」

リオが先を促す。

「リオちゃんは、どうして『ロウ』がこれだけ街の噂になったと思う? 君も見た、闇の森に棲んでるセルペンテっていう蛇の妖魔の噂は、まったく立っていないというのに」

「それは…目撃者がいたから…っていう事は…ロウを見ても、生き残った人達…」

そこまで考えて、リオはソールの言わんとすることの意味を悟った。今まで、ロウに誰かが殺されたという話は、聞いていない。

「フィルが狼に変身するのは、妖魔が出没した時だけ。妖魔が出た時に、街の人間が森に近づいたら大変だしね」

ソールはリオを後押しするように言った。

「もしその気があるんなら、明日また来てよ。その時には、フィルも今よりは落ち着いてるだろうからね」

第五章・完

第六章 危険の予感

「フィル、もしかして今日、セルペンテの巣に行く気じゃないだろうね？」

フィルの正体がリオとトトにバレた次の日の朝食の時、ソールはそれとなく尋ねた。

「……？そうだけど、それがどうかしたの？」
フィルは首を傾げて聞き返す。

「大丈夫なのかい？セルペンテは、妖魔の中でも特に巨大で狂暴な奴らだ。子ならそれでもまだフィルの力で何とかなるけど、親は体長が十五メートルもあるんだ。今のフィルに、それが倒せるのかい？」

ソールは言った。

「無理だったら、放って置けっというの？」
フィルは反発して言う。

「そうは言っていないよ。ただ、フィルは狼人間といってもまだ半人前だし、もしフィルに何かあったら、僕はお姉さんに申し訳が立たないんだ」

ソールの言う姉、とはフィルの母親・ネリルの事だ。

「でも、親を倒さなきゃ、また街が危険に曝される……叔父さんは、母さんがどうして死んだのか、忘れたの！？」

「そうじゃない！フィルは今混乱してるんだ。昨日、あんな事があったから。とにかく、まずは落ち着くんだけ」

ソールも語気を強めて言う。その有無を言わせぬ口調に、フィルも取り敢えずは反論を止めた。

「フィル、僕の予想が正しいなら、君は、この街を去ろうとしてるんだ。だから、その前にセルペンテを倒さなければいけないと焦ってる」

フィルが落ち着いたのを見てから、ソールは言った。神妙な面持

ちで聞いていたフィルは、凶星らしく顔を俯けた。

「でも、状況はフィルが思っているほど酷くはないんだ。少し時間
が要るかもしれないけど、リオちゃんもトトくんも、きっとフィル
の事を受け入れてくれるはずだ。君は、二人を信じていないのか？」
「信じるとか信じないとか、そういう問題じゃない。ソール叔父さ
んだって知ってるじゃないか」

フィルは先ほどよりは語調を緩めつつも、言い返した。フィルは
ソールから歴史を学ぶにあたって、狼人間が辿ってきた過去につい
ても読んでいる。人に正体を知られた狼人間が、どんな末路を辿っ
たか、それは言葉にすることも憚られるような、この国の黒歴史だ。
それを知っている狼人間のフィルが神経質になるのも、致し方のな
いことだ。

「とにかく僕は今日、セルペンテの親を倒して、この街を出て行く。
もうこれは、しょうがないことなんだ」

食事にまつたく手を付けないまま食卓を立ち、顔を俯けてそう言
うフィルの顔の表情は、この上なく悲痛だった。

フィルがダイニングルームを出て行くのを見届けると、ソールは
フィルが出て行ったドアを見つめながら、一人考え込んでいた。

「どうだ、リオ。気持ちは決まったか？」

その日の昼頃、樫の木の下でリオと待ち合わせていたトトは、や
つてきたリオに聞いた。

「私、たぶん、決まったと思う。なんだが、まだはつきりとはして
ないけど」

リオは自身なさ気に言った。

「つたく、らしくないな、リオ。もっといつも通りしゃきしゃきし
るよ」

トトは不器用なりにリオを励まそうとして言った。

「そういうトトはどうなのよ？」

リオは言った。

「オレは…オレも、何となくかな」

トトはちよつと痛いところを突かれたように言った。

「ねえ、そういう事ならさ…一度、フィルに直接会ってみない？」

リオは控えめに提案する。

「…確かに、それが一番手っ取り早いかもな。でも、オレ達が行ったとしても、会ってくれるのかどうか」

一考してから、トトは言った。

「実は私、昨日一回行ってみたのよ。そしたら、やっぱり会ってくれなかったけど、ソールさんは、明日また来てくれたらフィルも落ち着いてるだろうって」

「なるほどな…じゃあ、そうするか。とにかく、なにもしないよりはマシだろう」

リオの言葉に、トトも頷いて言った。

二人はアグノスの教会に到着すると、四角い扉の横に据え付けられている呼び鈴を鳴らした。軽やかだがよく響く音が鳴り、程なくして扉が開かれ、ソールが顔を出した。

「ああ、二人とも、よく来てくれたね」

ソールは、ほほ笑んで出迎えたが、そのほほ笑みはどことなく無理に繕っているようにも見える。

「なんだか、疲れて見えるんですけど、大丈夫ですか」

リオが心配して尋ねると、ソールは困ったように頭の後ろを掻いた。

「いやあ、思ってたよりもフィルが強情でね…どうしてもこの街を出て行くって言って、僕の話聞いてくれないんだよ」

「アグノスを出て行く？フィルは、そこまで深刻に？」

トトは驚いて聞き返した。

「そうなんだよ。本人にとっては、生き死にも関わり兼ねない問題だからね」

「そうなんですか…」

リオは自分の中にフィルへの同情が込み上げてくるのを感じた。やはり、狼人間であってもフィルはフィル。大切な友達なのだ。リオは自分の中で、それを再認識した。

「フィルに会わせてくれますか？」

リオと同じような気持ちを感じたのか、トトも深刻な顔になって聞く。

「うん、君達さえよければ、ぜひ会ってほしい。多分、フィルを引き止められるのは君達だけだからね」

ソールはどこか嬉しそうに承諾した。

「大丈夫、どんなに取り乱しても、ロウになって噛み付いてきたりはしないから」

「リオ、行こう」

トトはリオを振り返って、決然とした表情で言った。その男らしい振る舞いに、そんなこと考えるような状況じゃないと思いつつ、リオは心臓がきゅっと締め付けられるような感覚を抱いた。

「ええ、行きますよ」

トトに勇気付けられて、リオは迷う事なく言った。

二人が教会堂に入ると、さして広くはないが教会らしい玄関ホールがあつた。その景色だけ見ていると、あまり人が住む場所には見えない。教会の建物のほとんどは当然、教会として使われているので、フィルやソールが普段暮らす場所はホールの左端の扉から真つすぐ続き教会の裏まで回るL字状のスペースだ。リオもトトもよく遊びに来るので、建物の構造はおおよそ分かつている。

二人は左端の扉から入り、真つ直ぐに行つたところにあるダイニングルームを抜け、その先にある階段を上つて行つた。その階段が上がつたところにある二つの扉の先にあるのが、それぞれフィルとソールの寝室である。

リオはフィルの部屋の前に着くと、そのドアをノックした。しかし、返事はない。続けて名前を呼んでみるが、やはり返事はなかつ

た。

「やっぱり、会ってくれないのかしら…」

リオは意気消沈して言ったが、トトはそれでは引き下がらなかつた。

「フィル、入るぞ」

それだけ言うと、トトは答えも聞かずに、ドアを開いた。リオも少し緊張しつつ、トトの肩越しに部屋を覗き込む。

「あれっ？」

しかし、そこにフィルはいなかった。ただ、大きく開かれた窓の脇で、カーテンが風にはためいているだけだ。

「まさか、フィルったら逃げ出したの？」

リオはすぐに思い付いたことを口にした。ここは二階だが、ロウの力を使えば、二階の窓から地面まで、無傷で降り立つことも簡単だろう。

「つたく、あんのバカ…」

トトはため息混じりに言った。

「でも、逃げるったって、一体どこに行ったのかしら」

リオは顎の下に手をあてて考え込む。

「おい、リオ、これ見ろよ」

トトはフィルの部屋の机の上に広げられた紙を示して言った。リオが近づいてみると、それは地図だった。どうやら、闇の森一体を表した地形図のようだ。もともと記されている情報に加えて、フィルの多様な書き込みがゴチャゴチャと加えられているので、この地図を完全に解読できるのは、恐らくフィル本人だけだろう。

「これって…もしかして、フィル、闇の森に向かったっていの？」

リオは緊張した声で言う。闇の森といえば、妖魔が住み着いているという噂が絶えない場所である。フィルのように妖魔に変身する力がある人間くらいでなければ、間違っても近づこうなどとは思わないような場所だ。

「でも、なんでこんな時に…」

「これは推測だが…フィルは、ここを出て行こうとしてるんだろう？ってことは、それまでに自分の使命を少しでも果たそうとしてい
るんじゃないか？」

トトは言った。伊達にフィルの親友を長年続けている訳ではない。
フィルがこういう時にどういう事を考えるのかは、容易に予想でき
る。

「使命…それって、街を守るために妖魔と戦うってこと？」

リオは信じられない思いで聞き返した。

「だとしたら、何か嫌な予感がする…せめてフィルが森のどこに行
くつもりなのか分かれば…」

「それってもしかして、ここじゃない？」

リオは地図の南西の一点を指した。そこは木のない平地になっ
ていて、赤いペンで丸く囲まれていた。

「だってほら、地図の上に赤いペンが乗っかってるじゃない。それ
でこの地図に赤いペンで書き込まれてるのはこの丸だけだから、こ
の丸はついさつき書かれたって事でしょ？」

「本当だ。リオにしては頭がいいな」

トトは感心したように言った。

「『にしては』ってなによ、もう」

リオは口を尖らせて言う。

「…行くか？」

トトはリオを見つめて、聞いた。リオは緊張しつつも、ゆっくり
と頷いた。

「どうだった？フィルは会ってくれたかい？」

二人が下の階に降りると、ダイニングルームで待っていたソール
が声をかけてきた。

「いや、それが…」

トトはソールに嘘をつくことを心の中で詫びながら言った。だが、
フィルが闇の森に向かい、自分とリオがその後を追おうとしている

などということがもしバレたら、絶対に引き止められてしまうだろう。

だが、なぜかトトは、自分達が行かなければならないということ
を直感的に悟っていた。

「声を掛けても、なかなか返事してくれなくて」

「そうか…本当に、どうしたらいいのかなあ、僕」

ソールは意気消沈して言った。

「だから、私たち、また後でもう一度来た方がいいかなって思うんです。いいですか？」

リオもどことなく申し訳なさそうな声音で言う。

「いやあ、それは本当に有り難いよ。フィルも、せっかくこんないい友達を持つてるのに、どうしてその友達を信じようとしなのかな」

ソールは悩み込むように言った。

「それじゃ、また後で来ますから」

トトがそう言って、二人は教会を後にした。

「…」

二人がダイニングルームを出て行くのを見届けると、ソールは席を立った。口には出さなかったが、ソールはリオやトトの表情や仕種に違和感を覚えていた。

微かに嫌な予感を感じながら、ソールは念のためフィルの部屋を
尋ねて見ることにした。

二階に上がると、フィルの部屋の扉が、少し開いていることに気がついた。すぐに歩み寄って扉を開き、部屋の中を見ると、危惧していたとおり、フィルのいない部屋の光景が目に入ってきた。

そして机の上に広げられた、ソールがフィルにあげた闇の森の地図を見て、ソールはすべてを理解した。

「はあ…まったく」

ソールはため息をついて言った。

「誰も彼も、大人の言うことを聞いてくれないんだから」

そう一人ごちると、ソールはすぐにフィルの部屋を出て、自分の部屋へと向かう。

フィルもリオもトトも、大人として、また教会の使徒として、妖魔の危険に曝す訳には行かない。自分の部屋に入ったソールは、外出用の外套を羽織り、机に立て掛けてあった本人の身長ほどの長さのある杖を手にする。

「…間に合ってくれよ」

ソールは祈るようにそう呟くと、部屋を飛び出して行った。

第六章・完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7291y/>

フェトレアス物語～狼 - Low - ～

2011年12月18日00時48分発行